

三島由紀夫「美しい星」論

— 円盤飛来地の意味するもの —

はじめに

三島由紀夫の「美しい星」(昭37・1〜11 『新潮』)が発表された昭和三十七年、日本で第一回科学者京都会議が開かれている。そこで湯川秀樹・朝永振一郎らが核実験禁止協定の締結を要請する声明⁽¹⁾を発表したが、その背景には激化する東西冷戦とそれに伴う核開発の競争があつた。人類滅亡に対する危機感⁽²⁾は日本のみならず全世界的に身近なものとして認識されていたのである。ところで同じ頃日本では、空前のUFOブームにも見舞われていた。核危機による平和運動の盛り上がり⁽³⁾と、UFOブームは一見無関係な現象のようである。しかしユングが「地球が人間にとって狭くなり、水爆の脅威のみか、さらに深刻なことには、怒濤のような人口増加が真剣に憂うべき問題となってきた今、人類がこの牢獄から逃れたい⁽⁴⁾」と願う心理が人々にUFOを見せるのだと分析するように、これらは決して無関係なものではない。

UFOが日本で認知されるようになったのは戦後のことである。昭和三十年頃より日本には各種のUFO研究団体が設立されたが、

中でも、荒井欣一を代表として東京で設立された(日本空飛ぶ円盤研究会)は以後の日本UFO研究の指導的役割を果たすことになる。

この会には、顧問として北村小松、徳川夢声ら、特別会員に、荒正人、新田次郎ら、会員として石原慎太郎や星新一、三島由紀夫など、多くの著名人が名を連ねていた。一部の熱狂的ファンや子供達のみならず文化人の間にまでそのブームは広がっていたのである。「美しい星」にはそういった、リアルタイムの世界情勢や風俗など、すなわち表層から見える時代が目一杯盛り込まれており、それらがこのテクストを支えていることは言うまでもない。しかし「美しい星」において三島が描いたのは、そういった表層の時代に消されてしまった歴史、すなわち、戦後の日本が科学の進展や経済の発展と引き換えに切り捨てていった過去の方であつたように思われるのである。本稿では、円盤飛来地の地として描かれている東生田や内灘といった場所が孕む「歴史」に着目し、それらを選び取った三島の意図を考えていくことにしたい。

1 なぜ東生田だったのか

九内 悠水子

前田愛は「ベルリン一八八八年」³⁾の中で、森鷗外の「舞姫」には、ベルリン中枢の制度的な空間、すなわちカイゼル帝国の権威と意志を表徴するモニュメンタルな空間と、踊子エリスの住いがあるクロステル街のエロティックな空間の二つが存在すること、また鷗外自身が積極的な意図を持ってその二つに象徴的な意味を持たせていることを指摘した。語り手の「余」、すなわち主人公の太田豊太郎が、ウンテル・デン・リンデンからクロステル街へと迷い込む過程の中に鷗外が浮かび上がらせたのは、一八八八年当時のドイツが抱えていた「支配と抑圧の構造」という社会問題であったと前田は読み解く。この、空間に時代を象徴させるという手法が三島中期の長篇で何度も試みられていることは以前拙論⁴⁾において言及した。「鏡子の家」(昭34・9 新潮社)や「午後の曳航」(昭38・9 講談社)などには、空間に、戦後の日本が抱えてきた「近代家族の幻想」という時代の縮図が如実に示されている。この時期の三島は、テクストの表面に立ち現れる時間と、空間を描写することによって立ち現れる潜在的な時間と、このふたつの時間の交差によって時代を映し出そうとしていた。「美しい星」もその延長線上にあると思われる。だが一口に、空間にみる時代といっても、「舞姫」、「鏡子の家」、「午後の曳航」などのそれと、「美しい星」とではその手法が少しずつ違うようである。たとえば、「舞姫」では、同時代に於ける二つの異質な空間、すなわち、支配者の街「ウンテル・デン・リンデン」と抑圧される者の街「クロステル」との対比によって一八八八年という時代を表している。同じように「鏡子の家」や「午後の曳航」では、寢室などに示される「大人の空間」と子供部屋に見られる「子供の空間」

との対比から、「近代家族」の綻びが見え始めた、昭和二十五年後半から三十年代にかけての一時代の縮図を読むことが出来る。このように、「舞姫」や「鏡子の家」などでは、同時代における空間の対比、つまり横の空間関係によって時代があぶり出されている。しかし、「美しい星」では、同一空間の変化、すなわち縦の空間関係が効果的に使用されているようである。

以下具体的に「美しい星」末尾の描出を見てみよう。羽黒一派との論争に敗れ、自身も末期癌という絶望の淵に立たされた重一郎は円盤飛来のお告げを受ける。テクストの末尾、人間に絶望した大杉一家は再び宇宙人としての結束を強め、故郷に帰るべく、お告げの地、東生田へと向う。

日曜の深夜に郊外へ出てゆく車は少く、ドライブは快適に運んだ。和泉多摩川の橋を渡ると、そこはすでに神奈川県で、間もなく、南武線のしんとした線路を渡った。登戸駅近傍の、灯台のやうな形をした火の見櫓のかたはらを左折する。目的地の東生田はそこからぢきである。車は県道から左へ入って、あかあかと点した田園風な東生田駅の裏手の広場に止った。そこは一人一人見えぬプラットフォームの夥しい光りが窓ごしに洩れるだけで、暗い草叢が空地のあちこちに点在してゐた。

このあと、その地で一家ははじめて揃って円盤を見ることに成功する。これまでは、別々に円盤を目撃することはあっても、揃って見ることは決してなかった。その結果、それぞれは互いに宇宙人であるという事の確証を持ち得ず、孤独を深めていたのである。こうして「末尾の末尾に、人間の絶望の果ての果てにあらはれ」た円盤

だったが、その飛来した地は東生田だった。「美しい星」では飯能や内灘、仙台、東生田といった地が円盤飛来の舞台となっている。選択の理由について三島は特に言及していない。⁵⁾しかし、何らかの意図によってこれらの地が選ばれた可能性は十分にあるだろう。

「美しい星」に出てくる東生田駅は小田急電鉄小田原線の駅であり、昭和三十九年「生田駅」と改称され、現在に至っている。生田駅は明治大学生田キャンパスの最寄り駅であるが、ここにはかつて陸軍の科学研究所が存在していた。通称登戸研究所とよばれたこの施設は、戦争の悪化に伴う本格的な地上戦を睨んで、昭和二十年三月に長野県に移転されるまでこの地にあったが、戦中は陸軍のトップシークレットであったから、その存在を知りえた者はごくわずかであった。しかも昭和二十年八月十六日には「国際法に違反する秘密・諜略兵器の開発・製造による戦争犯罪の責任追及」⁶⁾を怖れた関係者らが、早々と書類・機材等全ての物的証拠を隠滅している。こうして一旦は歴史から抹殺された研究所だったが、その存在を、GHQは見逃さなかった。さりとてこの研究所が敗戦を機に歴史の表舞台へ、その姿を現したかというそうではない。GHQは登戸研究所の研究成果を自国の軍事目的に利用しようと考え、「情報提供と引き換えに責任者の免責条件」を提示し、極秘事項として再びその歴史を封印してしまったからである。実は登戸研究所は、細菌・化学戦研究のため生体解剖を行った731部隊とも関連を持っていた。731部隊が、人体実験などの研究成果を米軍に引き渡すことと引き替えに戦後免責を受けたことはよく知られているが、登戸研究所でも同様の取引が行われていたのである。登戸研究所は四科に分か

れ、そこでされていた研究も幅広いものであったという。⁷⁾第一科では風船爆弾や放射線や強力電波による殺人光線といった物理的な研究を、第二科では農作物や果樹、人間や家畜などに対する「諜略兵器」、今日いうところの生物兵器の研究を、第三科では偽造紙幣制作に関する研究をそれぞれ行っており、第四科がこれら研究品の製造・補給を受け持っていた。前記のように、このような登戸研究所の実体は、一旦は、陸軍関係者及びGHQによって封印され歴史の闇に葬られる。しかし、昭和二十三年に起きたある事件によって、その存在がわずかながら明るみになることになる。それは、犯罪史上未曾有の兇悪事件として日本中を震撼させた「帝銀事件」であった。

昭和二十三年一月二十六日、東京都豊島区の帝国銀行に「東京都防疫班」の腕章をつけた中年の男が現れ、厚生省技官の名刺を差し出して、行員ら十六人に集団赤痢の予防薬と称する薬を飲ませた。男が吞ませたのは青酸系の毒物で、十二名が命を落とし、現金と小切手併せて約十八万余りが奪われた。その後の捜査で、この時使われた毒物は、即効性のある青酸カリではなく、遅効性の青酸ニトリールあるいは類似の青酸化合物であることが判明する。当初、事件の状況などから犯人は毒物に通じている人物であろうと推測され、その捜査の過程で、戦中この青酸ニトリールを開発した登戸研究所を始め731部隊など旧陸軍関係者の関与が疑われた。しかし、突如警察の捜査の矛先は旧陸軍関係者からテンペラ画家平沢貞通へと向けられ、昭和二十三年八月二十一日、平沢は逮捕される。彼は一旦自首したものの公判では無実を訴えた。結局、一審二審に続き昭和三十年に死刑が確定、確定後も支援者による再審請求は続いた

が、平沢は獄中生活三十九年の末、昭和六十二年五月十日に医療刑務所にて九十五歳の生涯を閉じた。死後も遺族などによって再審請求が行われている。

平沢の逮捕を受けて書かれた新聞記事には「第六化学研究所、登戸科学研究所、軍医学校」など旧陸軍の極秘部隊について捜査が及んだことが書かれているが、結局逮捕されたのは、毒物の知識や経験もない平沢であった。また死刑が確定した後も三十二年間という長期にわたって執行がなされなかった事から、司法当局自体が冤罪の可能性を疑っていたとの見方もある。平沢は冤罪だったのか否かは不明だが、この事件がいろいろな意味で世間の注目を浴びた事件であったことは間違いないだろう。また、事件の捜査や裁判に関する不透明さに疑問を抱く人も少なからずおり、作家松本清張、弁護士正木ひろし、評論家鶴見俊輔ら多くの著名人が平沢の裁判に関わっている。

特に松本清張は昭和三十五年から雑誌『文藝春秋』に「日本の黒い霧」と題する一連の、時事事件を題材とした社会推理小説群を発表した。これは下山事件、松川事件、帝銀事件など、戦後間もない日本でおきた不可解な事件をGHQの諜略という視点で読み解くものであり、連載時より大きな反響を呼んだ。清張はこの中で、事件に使われた毒物は戦中、登戸研究所で極秘開発されたものらしきことを指摘し、登戸研究所や731部隊関係者とGHQの裏取引に触れ、罪もない一市民が犯罪者に仕立て上げられてしまう危険性は勿論のこと、間接的ではあるが知らぬ間に細菌兵器の加害国の民となってしまう事への警鐘を鳴らしている。また「なぜ『日本の

黒い霧』を書いたか⁹⁾」では、警察が旧陸軍関係者に焦点を絞っていたにも関わらずGHQの圧力によって方針転換を余儀なくされたのではないかとの推測を述べている。

話が少し、「美しい星」から逸れてきたが、事は三島が、東生田で登戸研究所のあった場として認識¹⁰⁾していたかどうかの問題である。三島自身の著作の中に登戸研究所のことについて直接言及したものは見当たらないが、当時の新聞報道や、話題となった清張の小説を読み、その存在を知っていた可能性はかなり高いと思われる。ところで三島の清張に対する嫌悪については、橋本治が『三島由紀夫』とはなにもものだったのか¹¹⁾の中でその態度や理由を詳細に記している。橋本は、三島が清張を嫌った理由として、両者がいわゆる時事ネタを元に創作することを得意とする作家であったこと、またその手法の違いが、三島の清張に対する嫉妬を引き起こしたと分析する。橋本の分析の正否は別として、三島の清張に対する感情は、「松本清張さんのやうに、秘書団をつかつてゐる作家」、¹²⁾「松本さんの悪口になります」といった講演¹²⁾における口ぶりからも伺うことが出来る。とはいえ、清張を意識し、少なからずその著作に目を通していたことは、『張込み』などという短編は大正時代の短篇と同じパターンですよ。それで非常にうまい。ただ長篇いわゆる推理小説になれば、非常に論理的な欠陥が目立ったり文章が悪かったりしますね¹³⁾といった発言からも明らかである。それらのことより、三島が東生田にかつて登戸研究所があり、そこで生物兵器をはじめとする様々な開発が行われていたことを知っていた可能性は十分ある。しかしここで、登戸研究所から、旧陸軍の負の部分であるとか、GHQによる

占領であるとか、正義と悪、強者と弱者といった単純な図式を見いだすのはすこし性急と言える。なぜなら、「権力悪とか組織悪」を暴く、とか「被害者」の目線で何かを訴えるといったいわば清張的なアプローチを三島は好んでいないからだ。

三島が東生田という空間に見たものは、戦後が終わった時代の日本の姿ではなかったか。敗戦は人々の価値観を一八〇度変えた。戦後の民主主義の名の下に発展した日本は、「もはや戦後ではない」という言葉でもって過去を切り捨てていく。旧陸軍とGHQによって二度隠蔽された登戸研究所もその一つといえるだろう。しかも帝銀事件などによって一旦は人々の知るところとなったこの研究所に対する世間の関心は、長続きしなかった。ジャーナリズムなどによってその実体が明らかにされていくのは、昭和五十五年以降のことである。日本は高度経済成長の中で、アジア諸国に対する侵略国と⁽¹⁶⁾いった加害者の立場（登戸研究所も含まれる）は勿論のこと、世界最初の被爆国という被害者の立場（GHQによる占領、またそれによる弊害⁽¹⁷⁾例えば帝銀事件）にも目をつぶった。半ば意識的に過去を忘却したのである。しかしその上に築きあげられたものは大衆化、俗衆化に陥った空虚な社会にすぎなかった。このことに対する三島の危惧は後述するとして、次に、もう一つの円盤飛来地、内灘を見 てみたい。

2 内灘に残されたもの

「美しい星」では、大杉一家の他に、白鳥座六十一番星あたりの

未知の惑星から来たという羽黒一派、金星人の竹宮といった自称宇宙人たちが円盤を目撃している。しかし先述したように、めいめいに円盤を目撃して以来、大杉一家は揃ってこれを目撃することがなかった。その上その後父重一郎が受けた予告が三度も外れたことで、「疑ひやうのない共感や、動かしやうのない証拠」を求めようになつた暁子は金沢へ向かう。暁子はかねてより文通をしていた金沢在任の自称金星人竹宮から、「自分は円盤の出現の予報の能力を持つて」いること、またこの予告は「金沢に関する限り外れたことがなく、次の円盤出現は「十二月二日の午後三時半」だということを書いてよこした手紙を貰っていたのである。家族の反対を押し切つて金沢に向つた暁子は、そこで彼と円盤体験を共有することになる。この時、円盤が現れたのが、金沢市の近郊、日本海と河北潟とに挟まれた砂丘の村、内灘であった。暁子は砂丘の路傍にある「内灘試験場補償事業防風林工事」と書かれた立て札を見て「目を輝やか」す。

「わかつたわ。円盤がここへ現はれるのは、これと関係があるわけね。人間たちのあの有名な血みどろの闘争の跡に、今は平和な防風林の植林がはじまつてゐる。そこに円盤が現はれば、現はれたといふだけで、その象徴的な意味がはつきりするだけだわ。それがそのまま平和のメッセージになるんだわ」

「さあ、僕はさうは思はない」と竹宮は冷静に首を振つた。「そんなことはないでせう。人間どもの無意味な歴史と、僕の円盤と何の関係があるんです。ただ僕の円盤は北の海が好きなんだ」

昭和二十七年、この村に、米軍砲弾試射場設置の問題が持ちあがり、それへの反対運動が起こった。俗に言う内灘闘争である。九月十八日、「農林省から村役場へ、村内の砂丘地帯（内灘砂丘）と隣接する海面を在日米軍管轄の砲弾試射場として使用する旨の電報が届いた。これを対して「内灘村では、中山又次郎村長と漁業組合代表とが条件付受入れを一度表明したものの、村議会・婦人会・青年団などが『絶対反対』の声を上げ、以後内灘村はその方向で政府への陳情などの反対運動」を行っていく。しかし住民らの反対を他所に政府は、強行使用を決定、このような事態の中で、私鉄総連、日教組、全学連などの中央諸団体が加わって内灘闘争は全国的な運動へと発展していった。一時期は大変な盛り上がりを見せたが、複雑な組織関係や、内部抗争から次第に状況は膠着、長期化の様相を呈し、最終的には昭和三十三年の米軍撤収によって終息する。この試射場設置のため政府はかなり強硬な手段をとり、それが事態の混乱を招いたのだが、そこにはそうせざるを得ない経済的な理由があった。昭和二十七年といえば朝鮮戦争最中であり、特需の一環として小松製作所をはじめとする国内メーカーの砲弾生産が開始された時期であった。内灘砂丘は砲弾納品の為の試射場として選ばれた地だったわけである。何百億円とも知れぬ特需の発注は戦後の経済復興を目指す政府にとって逃すことの出来ぬ一大契機であり、何としても設置する必要があった。

つまりこの内灘砂丘も、先ほどの東生田と同じく、戦争・占領という歴史が忘却された地であった。その上に成り立つこれらの空間、円盤飛来地が、空虚な日本の姿の表象として示されていることは、

暁子と竹宮の会話からも読みとることが出来るように思う。暁子がかつてこの内灘砂丘でおこった「有名な血みどろの闘争」について触れた際、竹宮は即座に「人間どもの無意味な歴史と、僕の円盤と何の関係があるんです。ただ僕の円盤は北の海が好きなんだ」と否定した。この地にあえて意味づけをすることを嫌う竹宮の言葉は、歴史を封印した上で成り立つ戦後の日本の在り方と重なる。東生田と同じく、内灘砂丘も内灘闘争という過去を無くした空虚な空間として表象されていると言えよう。

ところで「美しい星」が発表されてから六年後の昭和四十三年、五木寛之は「内灘夫人」と題する小説の連載を始めている。ここには、東京の大学から内灘闘争に参加し、そこで結ばれて結婚した学生カップルのその後が描かれている。かつて熱心な活動家であった良平は、今や広告代理店の社長であり、かつての自分を「せまい世界の中で甘ったれた感傷にひたっていたに過ぎん」と否定している。一方、良平に影響され多少の背伸びをしつつ闘争に参加していた妻の霧子は、「あの内灘時代の私たちや、学生や、仲間たちは独りよがりの青臭いヒューマニズムに陶醉してた気恥かしい存在だったかもしれない」が、「あそこには、あの時代や、私たちの生き方には、大事なものの、美しいもの、一片の真実のようなものがある」。「それを否定するのは、つまり私たちが二人のつながりを否定することも同じ」であると、有閑マダムとして暮らす今でも内灘を引きずっている。しかし経済的成功を収めた良平は勿論だが、内灘にこだわり続ける霧子も、社長夫人としての経済的恩恵を十二分に蒙っており、共に大衆化、俗衆化したかつての活動家のなれの果て、と言えるだろう。

三島が内灘に見た、大衆化俗衆化した日本の姿を、五木も捉えていたのである。

ここまで、東生田と内灘という空間を考察し、それらが大衆化俗衆化された、「戦後」後の空虚な日本を表象しているのを見てきた。ところで、「美しい星」には、他にも同様の表象を示しているのではないかと思われる記述がある。

3 フォルクスワーゲンとナチスドイツ

左に挙げるのは、「美しい星」冒頭部分である。

十一月半ばのよく晴れた夜半すぎ、埼玉県飯能市の大きな邸の車庫から、五十一年型のフォルクスワーゲンがけたたましい音を立てて走り出した。エンジンが冷えていたので、音ばかり立てて発車に手間取るあひだ、乗ってゐる人たちの不安な眼はあちこちを探つてゐた。

フォルクスワーゲンは、ルノーやフィアットと並び、ヨーロッパを代表する大手自動車メーカー、ドイツのフォルクスワーゲン社によって製造された小型の自動車である。「フォルクスワーゲン・ピートル」の愛称で世界的に親しまれ、四輪自動車としては世界最多の生産台数を誇った伝説の車と言われている。しかし、フォルクスワーゲン社が、ヒトラー率いるナチス政権下で国策企業として誕生したことは、今日ではあまり知られていない。ヒトラーは、支持率確保の手段として、当時はまだ高嶺の花であった自動車を国民全員が所有できるようにと考え、ポルシェ社を創業したばかりのフェルデ

イナント・ポルシェに設計を依頼した。こうして出来たのが、「フォルクスワーゲン・ピートル」である。ヒトラーの国民車構想⁽²⁾は、第二次世界大戦参戦によって実現することはなかったが、フォルクスワーゲン社では敗戦後この車の本格的な量産と輸出を開始した。その結果貴重な外貨を獲得し、戦後のドイツの経済復興に大きな役割を果たしたとも言われている。ところで、三島がナチスについて言及したものに「ナチスは、虐げられた、失業した復員兵士たちに、掴み取りの幸福を許した。その掴み取りは、自家用車と別荘と宝石と役職であつた⁽²⁾」という一節がある。彼がヒトラーの国民車構想を熟知していた事が伺われよう。よつて「美しい星」において、大杉一家がこの車に乗っていることもまた、意味を持っていると言えるのではあるまいか。例えば、昭和三十三年に発表された三島の長編小説「鏡子の家」では、当時まだ珍しかったマイカーが登場するが、車種についての記述はない。また、既にトヨタが、昭和三十一年には純国産設計のクラウンを、同三年にはコロナを製造発売しているところから見ても、大杉家の車を輸入車のフォルクスワーゲンと設定したことにはなんらかの意図を讀みとるべきと思われるのである。前記のように、フォルクスワーゲンはヒトラー、ナチスドイツといった二十世紀の負の歴史の上に誕生した車であつた。しかし、戦後、それらの過去は消されて、高性能高品質が売り物の全世界的なヒット商品へと変貌を遂げていく。ことに戦後の日本では庶民の憧れだつた。

宇宙人であるという認識は、重一郎をはじめとする大杉一家の疎外感を癒し、優越感をもたらした。木村巧⁽²⁾⁽³⁾は宇宙人という認識で、

社会や大衆を超越していくという物語の枠組みを指摘している。恒久的な平和のため、人類に救済を施そうとしていた大杉一家が、フォルクスワーゲンに乗っていたこと自体すでにアイロニーだが、宇宙人という優越感で大衆に対峙しようとしていた彼らこそ、実はマイカーブームを先取りする大衆に過ぎなかったという強烈な諷刺が込められている。

4 天覧山改称の意図

次いで、同じような観点から、テクスト冒頭に出てくる羅漢山についても少し考えたい。父重一郎が受けた円盤飛来予告にしたがって大杉一家が登った山が羅漢山であった。結局彼の受けた飛来予告は外れ、ここで一家揃って円盤を見ることは叶わなかった。しかし羅漢山には、東生田や内灘と同じく、円盤飛来を予告された地としての共通点がある。羅漢山は飯能市に実在するが、「美しい星」執筆のはるか前、明治十六年には天覧山と改称されている。「明治十六年(1883)、明治天皇がこの山で陸軍大演習を統監したのを記念して、天覧山と改められた」⁽²⁴⁾のだ。三島は創作にあたって精密な構想をたて丹念な取材をする作家であったことは今更言うまでもないが、その姿勢は「美しい星」でも変わらない。竹宮の住む金沢や大杉一家の住む飯能、羽黒一派の住む仙台などには実際に赴き、そこで詳細なメモを取っている。「創作ノート」には、立て看板やバスの時刻が、東生田に至っては周辺地図が描かれている。そんな三島が、なぜ天覧山を羅漢山としたのだろうか。ノートには、明治天皇の御幸

によって改称されたといういきさつもしつかり記されており、無知やミスとは考えがたい。そのあたりの意図を考察したいがその前に、今一度、「美しい星」に描かれている時代を押さえておく。

三島は「鏡子の家」で『戦後は終わった』と信じた時代⁽²⁵⁾を描き、いち早く、「戦後」後の日本の陥った、大衆化した空虚な社会を切り取って見せた。そしてこの問題意識は後々まで続く。三島は林房雄との対談⁽²⁶⁾の中で、この大衆化社会、即ち横の社会が、テレビやマスコミの発達と共に瞬く間に席卷したことを指摘し、「それに対抗する概念を僕はさがしている」と述べる。三島は、「工業化ないし大衆社会化、俗衆の平均化、マスコミの発達、そういう大きな技術社会の発達」に対抗する概念を模索する過程で「日本とか日本人を考える」ようになったのだと言う。しかし彼は、清張のようにアメリカ、ないし占領軍といったいわゆる権力の側に批判の矛先を向けることはなかった。紅野謙介が「怒りは、それを強いたアメリカへ向かうことなく、あくまでも虚構の伝統や連続性が空虚化した日本の内部についてのみに向けられる」⁽²⁷⁾、丸川哲史が「三島にとつてのアメリカとは、まず敵であるよりも、日本を観察するための参照点として引き合いに出されてしまう枠組み⁽²⁸⁾」と、指摘する如く、あくまでも国内の問題として、近代化、西欧化、大衆社会化といった状況を処理しようと考えたのだ。そう考えた三島が、空虚な日本の先に見た光が、天皇という存在であった。

「民主主義の、言論自由の世の中」では、「いかやうな政治的な主張も」、「言論として声高に叫ぶ」事が出来、「デモ行動」も可能である。しかし所詮それらは、大衆社会の中で「再び忘れられるおそ

れのある、いくつかの政治的主張の一つ」に過ぎないことを指摘した上で三島は、「もはやわれわれのいちばん心の奥底で鋭い問ひを問ひかけ、外国のあらゆる力の干渉に対して、何千年の歴史・伝統をもつて堂々と応へ得るものはただ一つ、天皇しかない」と主張する。

しかし彼は、昭和天皇に対しては否定的であった。三島の思いえがく天皇とは、個人としてのそれではなく「文化概念としての天皇」であって、人間天皇、象徴天皇といった戦後的天皇観は一切認めない。『英霊の声』には人間宣言をした天皇への呪詛が明白に表れている。一方、明治天皇については、御製を高く評価している位で特に肯定も否定もしていない。ただ、三島は天皇制の揺らぎのそもその根本を、明治維新に見ていることは随所から伺える。たとえば、三島自決のわずか一週間前に行われた古林尚との対談、あるいは昭和四十一年に行われた林房雄との対談の中で三島は、現在の天皇観は、明治維新によって新しく作られた創作品であり、ヨーロッパの模造に過ぎないと切り捨てている。現在の日本の大衆化は、元を辿れば維新による近代化、即ち西欧化に端を発していると彼はみなしていた。そして、明治憲法には「天皇神聖不可侵」という一文でもって「西欧化に対する、一パーセントの非西欧化のトリゲ」が存在していることを発見する。そこに立ち返る、すなわち人間宣言によって無力化されてしまった天皇を再び神聖な存在へと戻すこと以外に、今ある日本の危機を救うことは叶わないと彼は考えたのである。

再び「美しい星」に戻って考えてみよう。明治天皇の御幸によって改められた「天覧山」という名称を採用せず、「羅漢山」と記した

のは、明治維新以降の、名をはぎ取られた天皇、つまり日本の無力化された天皇を表象していると解釈できはしまいか。あるいはアイデンティティを失った日本人の表象と見なすことも可能かも知れない。

おわりに

三島は武田泰淳との対談「文学は空虚か」(昭45・11 『文芸』)の中で「安部公房の文学は好き」だが、彼が「インテリの問題を、譬喩として提示する仕方は僕の方法ではない」と述べている。三島はあくまで「小説というものは、僕は譬喩にしない」ところで頑張らなければいけない」と考えていた。「美しい星」は一見SFのような体裁を取っているが、やはりここでも彼は、安部公房的な「譬喩」の小説世界を選択してはいない。三島はリアルに時代を切り取るうとした。彼が「美しい星」において試みたのは、円盤飛来地という空間に隠微された時間―歴史の再提示であり、それは、表層の時代、すなわち核兵器を含めた科学の進化、あるいは経済的發展という近代化の上に成立している空虚化大衆化した日本の姿への警鐘でもあった。

しかし同時に、「美しい星」は、自己も含めた芸術家への批判ともなっている。それは、「美しい星」に関する三島の自注と、大島渚との対談を並べると明らかだろう。「超自然的能力をはぎとられ、世俗の圧力にアップアップしてゐる宇宙人たちは、三島が痛烈に批判する、「何か信じたくてアップアップしている」「芸術家」の姿に

他ならない。三島は大衆化の危機に芸術家もまた晒されていることを「横の社会、つまり大衆社会というのは、逆に言えば一人一人が孤独になる社会で、それが全部等価になって芸術家も一つの歯車にすぎない」と語っている⁽³⁶⁾。大衆社会は実は孤独な人々の集合体であるという図式は、深い疎外感を抱く重一郎、あるいは互いに互いのことが信じられない大杉一家にそっくりそのまま当てはまる。また、「芸術家」もその中に陥ってしまっていることへの強い危惧が、「美しい星」に強く投影されていると言えるだろう。

「美しい星」から八年後、すなわち自決する年の七月、三島は「果たし得てゐない約束―私の中の二十五年」⁽³⁷⁾の中で次のように述べている。

私はこれからの日本に対して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかと、いふ感を日ましに深くする。日本はなくなつて、その代はりに、無機質な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一面に残るのであらう。それでもいいと思つてゐる人たちと、私は口をきく気にもなれなくなつてゐるのである。

「美しい星」は、重一郎ら（＝芸術家の象徴）が「救済」を諦め、自分達だけ故郷の星に帰ろうとするところで終わっている。「街を見納め」ながら、残された人間たちの行く末を案じる一雄に対し、重一郎は「放胆な、穩当を欠いた」調子で「なんとかやってくさ、人間は」と言い放つ。彼のこの呟きが、後年市ヶ谷のバルコニーにおいて「諸君のなかに、一人でもおれといっしよに起つやつはいない

のか。一人もいないんだな。（中略）それではここで、オレは、天皇陛下万歳を叫ぶ。天皇陛下、万歳」と言い残し、切腹してしまった三島の姿と重なってしまうのは何とも皮肉なことというより他ない。しかし少なくとも昭和三十七年の三島は、まだ日本への希望と文学の可能性を信じていたのだろう。信じていたからこそ、「美しい星」を書いたのに違いない。

注(1) 声明には二十一名が参加し、大仏次郎、川端康成、桑原武夫、平塚らいてう、我妻栄ら文学者も名を連ねている。

(2) C・G・ユング（松代洋一訳『空飛ぶ円盤』昭51・10 朝日出版社）。

なおユングのUFO解釈と三島「美しい星」のそれが似ていることについては、矢吹省二（ある悲劇的分析―三島由紀夫『美しい星』考）平1・3 『國學院紀要』27）、有元伸子（三島由紀夫『美しい星』論―二重透視の美学）平3・3 『金城学院大学論集』33）らの指摘がある。またカーティス・ビーブルズは（皆神龍太郎訳『人類はなぜUFOと遭遇するのか』平11・5 ダイヤモンド社）の中で、UFOは冷戦などの社会的事件（不安）の産物であることを指摘している。

(3) 前田愛「ベルリン―八八八年―都市小説としての『舞姫』」（昭55・9『文学』）。

(4) 拙稿『鏡子の家』から『午後の曳航』へ―（空間）にみる（時代）―（平17・12 『広島女学院大学国語国文学誌』35）。

(5) 「主人公を、夢想と無為にふさはしい、地方の財産家の文化人に仕立てる必要がある」（三島由紀夫『空飛ぶ円盤』の観測に失敗して―私の本『美しい星』 昭39・1・29 『読売新聞』）といった言及はあるが、地方都市というだけでは、飯能を選択した理由にはなるまい。

(6) 海野福寿・山田朗・渡辺賢二編『陸軍登戸研究所―隠微された超略秘密兵器開発』（平15・3 青木書店）。

(7) 注(6)に同じ。

- (8) 「毒物究明は旧陸軍部隊を総ざらいしたが、都内にあつた第六化学研究所、登戸科学研究所、軍医学校などいずれも極秘部隊だっただけに捜査は困難をきわめ（後略）」（『平沢の自白まで』昭23・9・28 『朝日新聞』）。
- (9) 松本清張「なぜ『日本の黒い霧』を書いたか—あとがきに代えて—」（昭35・12・4 『毎日ジャーナル』）。
- (10) 三島由紀夫は「画家の犯罪—Pen, Pencil and Poisonの再現」（昭23・9・11、13 『時事新報』）において「帝銀毒殺事件の犯人は、可成高名な一画家にかゝつた有力な容疑によつて、ありうべき解決へ向つて進んであるやうに最近の新聞は報道してゐる。あのやうな破天荒な常規を逸した犯罪がどこかで美の問題と秘密な契約を結んでゐることは、もつと早く考へられてよい事柄であつた」と、芸術と犯罪が紙一重であることを論じている。つまりこの時点では三島は、帝銀事件とは、平沢という犯罪に魅せられた芸術家（画家）の行為であると理解し、それはあたかもワイルドの「ペン、鉛筆及び毒薬」という評伝の再現のようだと考えていた。但し、帝銀事件に対する登戸研究所の関与が新聞に出たのは、これが発表された約二週間後の九月二十八日であり、また昭和三十五年には清張の「日本の黒い霧」が発表されている。その後三島が事件に対する認識を改めた可能性は十分ある。
- (11) 橋本治『三島由紀夫』とはなにもものだったのか（平14・1 新潮社）。
- (12) 三島由紀夫「現代日本の思想と行動」（昭45 山王経済研究会）。
- (13) 三島由紀夫・伊藤整・本多秋五「対談」戦後の日本文学（昭40・1 『群像』）。またこのあと伊藤は、「ぼくはあの人のそういうものは読まない。読んだのは『黒い霧』です」と「日本の黒い霧」を話題に乗せている。
- (14) 例えばそれは、武田泰淳との対談（三島由紀夫・武田泰淳「文学は空虚か」昭45・11 『文芸』）の中での「たとえば黒井千次が、いろいろ権力悪とか組織悪というものをアレゴリーに作るよ。（中略）そんなもの挑発してなにやるんだ。権力悪だの組織悪なんて、いくら小説に書かれたつてびくともしいしね。そして小説書いたからといって別に怒りもしないよ」といった発言や、小汀利得との対談（三島由紀夫・小汀利得「天に代わりて」昭43・7 『言論人』）での「広島市民には非常に
- 気の毒だけれども、つまり『やられた』ということが、何よりも強い立場とする人間ができてくる。そうすると、やられないやつまでも、やられたやうな顔をする方がトクだといふようになる」、「被害者という立場に立てば、強いといふことはわかっちゃつてゐる。なぜなら向こうは力が使えないにきまつてゐるんだから。（中略）ですから核抑止理論といふのは力対力の理論で、これはある意味では古い理論だと思ふんです。いまだに力対力というものが、一方で敵然とあるんですけれども、しかし、敵然と力対力があるその下では強さ対弱さといふものの戦争になつてゐると思ふんです。だから全学連がいかに乱暴してゐるやうにみえても、あれは被害者を氣どつてゐるわけです。われわれは反動権力のおかげでこんなひどいめにあつてゐて、なぐられてゐるじゃないかと。（中略）ああいう逆手のとり方というのは、日本では一般的になつちやつた。いつも個人が責任をとらないからです」といった発言から伺えよう。
- (15) 中野好夫「もはや戦後ではない」（昭31・2 『文藝春秋』）。
- (16) 『陸軍登戸研究所—隠微された超略秘密兵器開発』（注(6)）によると、帝銀事件、「チー三七号偽札事件」（昭36）といった犯罪事件を契機に「厚いベールがはぎ取られ、登戸研究所の実体がおぼろげなら」も見え始め、その後一九八〇年代からジャーナリズムによつて取材が盛んになつたことで社会的な注目が高まつていったといふ。
- (17) 「結局経済の自動的な動きによつて、こういうふうな状態になつて繁栄をもたらし、そのかわりこういう社会の一種の精神的な停滞をもたらしている」（三島由紀夫・林房雄「対談」対話・日本人論（昭41・10 番町書房））。
- (18) 広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論 1950年代を中心に』（平18・1 大月書店）。
- (19) 「内灘」については、水洞幸夫「現代文学と海—内灘を視座とした素描」（平19・1 『イミタチオ』46）に、「『平和』対『闘争』という対立の図式その物を無化してしまふところにその本質的な役割がある」との指摘がある。
- (20) 五木寛之「内灘夫人」（昭43・8・30〜同44・5・10 『東京、中日、西日本新聞』）。
- (21) 「二〇世紀の独裁者は、かつての専制君主とは違つて国民の人気取り

- からはじめなくてはならない。”国民のための“車”はその意味でも
 絶好の手段であり、”パンとサーカス”政策の一環でもあった。(中略)
 やがてヒトラーは、VW計画、アウトバーンの建設、そして軍備の拡充
 を新政策の三本柱としたのだった”(折口透『自動車の世紀』平9・9
 岩波新書)。
- (22) 三島由紀夫「自由と権力の状況」(昭43・11 『自由』)。
 (23) 木村巧『美しい星』―『宇宙人』というアイデンティティ(『国文学
 解釈と鑑賞』65(11) 平12・11)。
 (24) 埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会編『見て学ぶ埼玉の歴史』
 (平14・2 山川出版社)。
 (25) 三島由紀夫『鏡子の家』そこで私が書いたもの(昭34・8 『鏡子
 の家』広告用ちらし)。
 (26) 注(17)に同じ。
 (27) 紅野謙介「占領」(松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫研究
 事典』平12・11 勉誠出版)。
 (28) 丸川哲史「帝国の『幻影』―三島由紀夫『文化防衛論』再考」(平12
 ・11 『ユリイカ』)。
 (29) 三島由紀夫「70年代新春の呼びかけ」(昭45・1 『国民協会』)。
 (30) 三島由紀夫「文化防衛論」(昭43・7 『中央公論』)。
 (31) 三島由紀夫「本のことなど―主に中等科の学生へ」(昭17・9・28
 未発表)、三島由紀夫・林房雄「対談」対話・日本人論(注(17))など。
 (32) 「ぼくが戦後における天皇観をひどく嫌悪しているのは、あれはヨー
 ロッパの制度をまねて明治になってつくられた創作品だという考え方に
 ついてですよ」(三島由紀夫・古林尚「対談」三島由紀夫最後の言葉」
 (昭45・12)同46・1 『図書新聞』)。
 (33) 「西欧化ないし……近代化イコール西欧化と考えれば、そのなかでい
 ちばん国の本質的なもの(戦前に国体と称したものがそうなのかもしれ
 ませんが)、純粹性、その純粹性がどうしても西欧化できないものはい
 ったいなんだっとうかど、また西欧化できなかったことはまちがいで
 ったのか、あるいはそれも西欧化できると信じたことはまちがいで
 ったのか、そういう反省の時期にいまきている。それが天皇制のことを言
 いだした原因ですけれどもね」、「僕の天皇に対するイメージは、西欧化へ
 の最後のトリデとしての悲劇意志であり、純粹日本の敗北の宿命への洞
 察力と、そこから何もかを汲みとろうとする意志の象徴です」、「明治
 憲法の発布によって、近代国家としての天皇制国家機構が発足したわけ
 ですが、『天皇神聖不可侵』は、天皇の無謬性の宣言でもあり、国学的
 な信仰的天皇の温存でもあって、僕はここに、九十九パーセントの西
 欧化に対する、一パーセントの非西欧化のトリデが、『神聖』の名におい
 て宣言されていた、と見るわけです」(注(17))。
- (34) 三島由紀夫『空飛ぶ円盤』の観測に失敗して―私の本『美しい星』
 (昭39・1・29 『読売新聞』)。
 (35) 三島由紀夫・大島渚「ファシストか革命家か」(昭43・11 『映画芸
 術』)。
 (36) 注(17)に同じ。
 (37) 三島由紀夫「果たし得てゐない約束―私の中の二十五年」(昭45・7
 ・7 『サンケイ新聞(夕刊)』)。
 (38) 三島由紀夫「無題」……自民党と……」(昭45・11・25)。バルコニ
 ーからの演説。「決定版三島由紀夫全集」36(平15・11 新潮社)収録。
 *三島の文章は全て「決定版三島由紀夫全集」(平12・11)同17・12 新
 潮社)に拠る。
- (くない ゆみこ 広島女学院大学非常勤講師)